

サマープログラム体験記

名古屋大学医学部医学科 5年 徳田優美

このたび私は、2025年7月8日から14日まで、Johns Hopkins University、Duke University、University of North Carolina、Peking University、そして名古屋大学の学生とともにサマープログラムに参加しました。このプログラムで得られた学びは多くありましたが、ここでは特に印象に残ったことを3点述べさせていただきます。

まず1つ目は、岐阜県の「かがやきクリニック」における在宅医療の見学です。私は幸運にも、理事長である市橋先生の訪問診療を見学する機会をいただきました。かがやきクリニックの訪問診療では、患者さん1人あたり30分や1時間と、一般的な外来診療と比べて十分な時間が確保されており、医療行為だけに限らず、日常生活で困っていること、リハビリや介護の状況、ご家族の様子など、隅々までお話を伺っていました。また、ご自宅という環境で診察を行うからこそ、患者さんの暮らしぶりや家族との関わり、日常の不便さなどが自然と伝わってきます。こうした情報は病院ではなかなか得られないもので、在宅医療だからこそ得られる気づきが患者さんにとって最適な医療につながっていることを強く実感しました。名大病院での外来実習では、どうしても時間に追われた印象を受けることもありましたが、「人」と向き合う医療の在り方を改めて思い出させてもらったと感じています。たとえ将来自分が多忙な環境に置かれたとしても、そのように一人ひとりの患者さんの生活や人生と向き合う姿勢は忘れないようにしたいと感じました。

今回の見学で最も印象的だったのは、ある全身の運動機能を失った患者さんが、「家族の負担になるのは嫌だ。もう死にたい。」と口にされた場面です。病気による身体的制限に加えて、ご家族を想って自責の念から出た言葉だと思いますが、その言葉の重みには衝撃を受けました。しかしそれでも、市橋先生は動揺することなく真正面から気持ちを受け止め、寄り添い続けており、その姿にはとても感銘を受けました。地域に根ざし、人と向き合う医師の姿に触れる中で、終末期医療や在宅医療に対する関心が一層高まったように思います。大変貴重な経験となりました。

2つ目は、他国の学生たちとのディスカッションを通して、日本、アメリカ、中国それぞれの医療制度の違いを深く理解できたことです。医療保険制度や医療機関へのアクセスの違いだけでなく、GP制度や医学部のカリキュラムの違いなども学べ、非常に興味深かったです。アメリカや中国では、日本ほど在宅医療が発達しておらず、また日本ほど国民皆保険制度が充実していないため、皆すごく興味深そうにしていました。私としても、これが当たり前だと思っていた日本の医療制度はとても恵まれた環境だったのだと実感することができ、勉強になりました。また「30年後の地域医療の課題」というテーマでの発表では、少子高齢化が進む日本においてこれから私たちがどういう医療を担っていくべきなのか、どのような教育システムを導入するのが良いのかなど、とても建設的な議論がなされました。限られた時間の中で質の高い発表を完成させた他国の学生たちの姿勢や堂々たる発表態度からも、大きな刺激を受けました。

3点目として、国境を越えたつながりを持てたということもとても大きく感じています。このプログラムでは、浴衣を着ての美濃散策、鶴飼見学、市橋先生主催の懇親会など、日本文化に触れる機会を多く準備してくださっていました。海外の留学生たちが皆目をキラキラさせながら楽しんでいる姿を見て、私自身も日本の魅力を再確認することができました。また、授業外にも伊勢市観光や食事会などを共に楽しみ、想像以上に深い親睦を築くことができたと感じています。皆このプログラムが終わった後も定期的に連絡をくれ、また日本に行きたいと伝えてくれ、このプログラムを通してそのような友人を持てたことをとても嬉しく思います。また、プログラムが始まる前は、正直自分の英語力や性格上、ついていけるか不安に思ってしまう部分もありましたが、実際には、

たとえ英語力がなかったとしても、言葉の壁以上に、相手をリスペクトし、積極的に関わろうとする姿勢の方がはるかに大切だったのだと感じます。たとえ文化や言語の壁があったとしてもこのように相手をリスペクトし、人に優しさを分け与えられるような人間になりたいと心から思いました。また、このプログラムを通じて、国際的に活躍したいという私の夢もより一層強まったように感じます。

最後に、本プログラムを通じて得られた学びや経験は、私にとってかけがえのないものとなりました。このような貴重な機会を与えてくださった国際連携室の先生方をはじめ、市橋先生、かがやきクリニックのスタッフの皆様、講義をしてくださった先生方、このプログラムを支えてくださったすべての関係者の方々に心から感謝申し上げます。この経験を糧に、さらに今後の学びにしっかり繋がりたいと思います。ありがとうございました。

